

研究目的

現在、島根県立島根海洋館アクアスでは、重度の障がいを持っている人や山間部に住む人、また引きこもり、不登校、高齢であるといった理由でアクセスしづらい人が増えている。そういった、アクアスに来館できない、または来場しづらい人たちにもアクアスの生き物を観賞し楽しんでもらいたいと考えた。しかし、そのような人たちに実際に来場してもらうのは、身体的にも心的にも難しい。そこで、対象者が家や施設にいながら、デバイスを通してデジタル上で観賞できるようにする。また、アクアスでは障がい者や引きこもり、不登校といったアクアスに行きづらい人たちを対象とした、休館日にアート活動をする「アクアート」というイベントも開催しており、そのイベントを通して興味を持った人たちがアクアスへ訪れるきっかけになると考える。

このような取り組みによって、アクアスを通して対象者の地域愛着が深くなり、さらに心身的に健康にもなると考える。この研究では、デバイス上でのアクアスの生き物の観賞と、アクアートのイベントが、対象者にどのような効果を与えるのかを検証する。

アクアートとは

アクアートとは、島根県立島根海洋館アクアスの休館日に行われる、障がい者やひきこもり、不登校といった人たちを対象としたイベントであり、対象者はアクアス館内のペンギン館にて自由にアート創作活動ができる。イベント実行委員会には、アクアスとの連携先の事業者、島根県立大学地域づくりコース村岡ゼミ、アトリエ・スノイロ、アートベース・しまねいろ等、様々な方が参加し、企画・運営をしている。今回は、村岡先生の紹介で私自身も実行委員会として参加させていただいた。

このイベントは2023年から始まり、今年2025年に第3回が行われた。10月28日火曜日と、11月4日火曜日の2回の創作日とそこで制作されたアート作品をアクアスペンギン館で展示する「うみ・いろ・かたち展」、さらに創作ワークショップとデジタルワークショップを合わせたイベント「ミニアクアート」が開催された。アクアートの第1回では、障がい者の文化芸術活動の復興を目的に障がい者を主な対象として開催したが、2回目より小学生や高校生、地域の人たちを巻き込んでの開催となった。

活動① - アート創作活動

10月28日、11月4日に行われたアクアートでは、対象者がアクアスに訪れ、ペンギン館にてそれぞれが自由に創作活動を行った。

このイベントでは、ペンギン館にあらかじめ絵具やマーカーなどの画材が用意された絵を描くコーナーと、紙粘土やストロー、おはじきなどの様々な工作材料と、さらに本物のペンギンの羽といった、水族館ならではの画材が用意された造形活動コーナー、またペンギン館2階では海を眺められる大きな窓に、透明でカラフルなシールを切り取って自由に貼ることができるスタンドグラスコーナーが設けられ、参加者はその中で自由に活動ができるというような形となっていた。2日目にはそれらのコーナーに加え、筆や墨、半紙が用意された書道コーナーも追加され創作の選択の幅が広がった。午前と午後で活動を分け、それぞれ午前は招待枠、午後は募集枠といったように、より多くの対象者が参加できるような構成であった。

アクアート実行委員会とアクアス職員を中心に、江津工業高校の学生や島根県立大学地域づくりコース村岡ゼミ3回生が運営に参加しイベントが実行された。

1日目、10月28日

1日目は、小学生や福祉施設を利用する方たちを対象として「しずかでにぎやかなうみ」というアート活動が行われた。午前の部は、招待枠である小学生児童たちと、関係者である江津工業高校の選択美術・書道の生徒たち約30名を中心として行った。創作活動では、児童と高校生が一人一組のペアとなり、児童のサポートを高校生がするといった形で、各々コミュニケーションを楽しみながらアート制作に取り掛かった。創作コーナーは、お絵かきコーナーと造形コーナー、スタンドグラスコーナーの3つである。また、画板も用意され、館内を自由に歩き回り好きな場所で好きな絵を描くこともできた。それぞれが好きなようにアートを制作し、真剣に取り組む様子や、児童・高校生関係なく笑顔で話しながら和気あいあいとした活動が見られた。午後の部では、募集枠である一般の地域の人々が参加した。応募人数は多くはなかったが、その分落ち着いた様子で活動ができた。

2日目、11月4日

2日目も1日目と同じく、小学生たちと福祉施設の方たちを対象として「しずかでにぎやかなうみ」の活動が行われた。午前の部では、波佐小学校の児童や江津工業高校の生徒、フリースクールの生徒たちの計33名^{*1}が参加し、10月28日と同様に児童と江津工業高校の生徒がペアとなって創作活動を行った。今回は前回のコーナーに加えて、書道コーナーが追加されたため参加者たちの活動の幅が広がり、より一層賑わいを見せた。高校生たちもサポートしながら、自分たちでもアート活動を取り組み、小学生たちと笑い合いながら楽しそうに創作する姿が見られた。午後の部では、福祉施設の方々や一般で応募があったの方々約40名^{*2}が参加した。各々が真剣に作品に向き合いながら、時折楽しそうに施設職員と談

笑したり、できた作品を笑顔で紹介したりする姿が印象に残っている。参加者たちは泳ぐペンギンたちを眺めながら、アート作成を通してゆったりとした時間を過ごしていた。



実際の活動中の姿

活動② - 創作ワークショップ

11月6日に、浜田養護学校にて創作ワークショップを行った。このイベントではアクアアート実行委員会に加えて島根県立大学地域づくりコース村岡ゼミの3回生が浜田養護学校の生徒たちのサポートとして参加した。アクアスで行った「しずかでにぎやかなうみ」と同じ画材を浜田養護学校へ持ち込み、教室の床に長方形の長い1枚の障子紙を敷いてそこに生徒たちが自由に書き込むという形で創作活動を行った。初等部、中等部、高等部の順に活動を行い、浜田養護学校の生徒と大学生が交互になるような配置でコミュニケーションをとりながら楽しく活動をした。各々が好きなようにアートに触れ、筆で描く、ローラーで塗る、容器に入った絵具を巻き散らす、手や足に絵の具をつけてスタンプするなど様々な手法を使い、決して一人では作られない、自由なアート作品となった。

紙に描く中で楽しくなってきたのか、紙以外にも自分の腕や顔などにも描き始め、枠にとらわれてない本当の意味でのアート制作活動を楽しんでいたように思われる。そうして出来上がった作品は、まったく意図されていない、完成した姿も創作中の姿も自由である素晴らしい作品であった。

活動③ - うみ・いろ・かたち展

うみ・いろ・かたち展では、「しずかでにぎやかなうみ」で創作されたアート作品をペンギン館1階にて展示された。ペンギン館1階の壁には、1面にキャンバスに描かれた作品が飾られ、その下には浜田養護学校での創作ワークショップで創作されたアートが飾られた台に、「しずかでにぎやかなうみ」で創作された紙粘土の立体アート作品が飾られた。ペンギン館2階では、窓にスタンドグラスの作品が展示された。この展示は、アクアスに訪れた

人全員が見ることができ、誰でも自由に観賞できるようになっている。それによって、ただ展示されているだけではなく、アクアートのような活動があるという宣伝効果やアートの面白さ、障がい者への認識の変化をもたらした。展示中には、創作活動に参加してくれた福祉施設利用者の方々の姿なども見られ、和気あいあいと作品を鑑賞したり、館内の魚たちを観賞したりしていた。



展示の様子

活動④ - デジタル上での観賞

12月11日に開催されたミニアクアートでは、スマートグラスと水中ドローンを使ってデジタル上でペンギンたちを観賞できるイベントが行われた。どちらも Zoom を通して行われ、アクアスに来館した人やアクアス館内以外で Zoom に接続した人たちが自由に観賞した。参加費用は取らず、誰でも参加できるイベントであった。

午前中にはペンギンの餌やりの時間に合わせて、餌やり担当のアクアスの飼育員さんにスマートグラスをつけてもらい間近のペンギンをデバイス上に映し出した。スマートグラスとは、眼鏡のかたちをしたカメラであり、装着した人の視界をそのまま体験できる機械であったため、飼育員さんの視線をそのまま体験できるようになっている。また、音声もカメラを通して聞こえてくるので、飼育員さんの解説も聞くことができ観賞だけでなく、知識としても楽しむことができた。このように普段、観賞しているだけでは体験できない貴重な映像であった。

午後には水中ドローンでの撮影と配信を行い、泳いでいるペンギンを泳いでいるペンギンたちと同じ視線で観賞できるようになっていた。水中ドローンは島根職開発促進センター（ポリテク島根）さんが操縦し、普段から練習を重ねた操縦技術と手作りされたドローンのなめらかな動きによって、ペンギンたちが極度に警戒することなく、のびのびとした姿を撮影することができた。

アクアス館内だけでなく、福祉事業者や保育園と Zoom をつないで観賞をした。画面越しに聞こえる楽しそうな声や画面を凝視する姿から、観賞を楽しんでいたことがうかがえた。

また、全ての日程が終了後、イベント関係者にインタビューを行った。その際に、奨励金を使用しインタビュー対象者の音声を正確に拾うことができる、小型のマイクを購入した。関係者各位のイベントへの想いや、イベントを通して対象者やその周りの人にどんな影響を与えたいのかなどの感想を動画としてまとめることで、よりイベントへの理解度やアクアスへの愛着度が深まり、さらにアクアートの参加者数の増加、イベント参加者やアクアス来館者の定常化につながると考えた。

結果

このイベントを通し、アート活動を自由に楽しめたことで、参加者たちはアクアスと楽しかった思い出が結びついたと考える。実際に、アクアート「しずかでにぎやかなうみ」に参加した方々が開館日にも訪れていたことから、アクアートのイベントがアクアスに訪れるきっかけになりうると考えた。イベントをきっかけにアクアスを訪れるひとは、イベント当日にはゆっくり見ることができなかった、館内の様々な生き物の観賞や、シロイルカやアシカなどのショーもさらに体験できるため、アート活動をして楽しかったという経験だけでなく、アクアスは楽しいところという認識が浸透し、よりアクアスへの愛着が強くなるのではないかと考えた。

またデバイス上の観賞の効果としては、その後実際に訪れたかの確認は取ることができなかったものの、当日の参加者の様子から大いに楽しんでもらえたことがうかがえる。よって、デバイス上の観賞はアクアスに訪れるきっかけなる可能性は十分ある。また、デジタル上の観賞はアクアスに来場できない人たちが楽しめる手段として有効なことが分かった。またデバイス上では、ただ生き物の様子を配信で流すよりも、今回行ったようにペンギンを間近で見ることができるという普段は見られない貴重な映像の方がより楽しんでもらえると考えた。しかし、そのような映像の配信はアクアス職員の負担が大きいため、継続して定期的に配信するのは難しいと考えた。

おわりに

この研究では、アクアートのイベントとデバイスを通したデジタル上での生き物の観賞が、対象者にどのような効果を与えるのかを検証した。今回の研究の対象である、障がい者や引きこもり、不登校といった人たちはアクアートでのアート活動を通して、アクアスへ訪れるきっかけとなった。また、同じく対象者である山間部に住む人や高齢であるといった理由で、身体的や距離的な意味でアクアスに来場できない人たちは Zoom を通した、デジタル上での観賞を通して、アクアスに来場せずとも楽しく、貴重な体験をすることができた。

これによって、デジタル上での観賞でも、アクセスに来館できない人たちを楽しませることができることが分かった。

参考

- ※1 2025.11.04 中国新聞掲載記事
- ※2 2025.11.05 読売新聞掲載記事